

精神看護学援助論における看護学生のコミュニケーション演習に関する研究 —聞き手・話し手双方の体験からの学び—

中山 亜弓*・澤田 由美

新見公立大学看護学部
(2013年11月13日受理)

精神看護学援助論において、成功体験を語るコミュニケーション演習を行い、学生は聞き手および話し手を各々体験した。その演習における学びを明らかにし、コミュニケーションスキルを高める教育方法への示唆を得ることを目的とした。コミュニケーション演習を受講した学生のレポートを質的帰納的に分析した結果、コミュニケーション演習において、学生は【反応を捉えながら伝える】【表情を添える】【話す環境を整える】【興味・関心を向ける】ことを学んでいた。話し手は聞き手に伝わるように話すことや、聞き手が自分に向けられる表情や態度などを受け取りながら話をしていった。一方、聞き手は話し手がどうすれば話しやすくなるのかを考え、話す環境や自分の態度に関心を向けながら話を聞いていた。今回のコミュニケーション演習において、すでに関係が築けている学生同士が成功体験を語ることでポジティブな感情を表現でき、さらに和やかな雰囲気や心地よい会話に繋がり、話す環境や相手へ興味・関心を考えながら会話をするスキルの向上につながり、学生同士の相互作用を伴った関係形成の過程を体験できる演習となったことが示唆された。

(キーワード) 精神看護学, コミュニケーション演習, 学生の学び

はじめに

コミュニケーションは相手とスムーズに会話を進めることではなく、相手を理解するために少しでも近づこうとする手段である¹⁾。特に精神科においては、患者—看護師の治療的関わりが重要な意味を持つ。そのため、様々なケアや関わりを通して患者の抱える問題に焦点を当て、患者の言動の変化を促し、自己成長と自己実現に手を貸し、人間全体を癒すことが必要となる²⁾。しかし、最近のグローバル化、IT化などの社会情勢の変化に伴いコミュニケーションに関わる様々な問題が生じている。看護学生に関しても、直接的なコミュニケーションが減少しているだけでなく、コミュニケーションを苦手としている傾向が見受けられる。また、核家族化、少子化、地域での人付き合いの希薄化、価値観や経験の多様化に伴い集団で行動することが少ないなど、生活体験は減少し共通体験も少なくなる傾向にある³⁾。そのため、看護教育の内容と方法に関する検討会においても、強化すべき教育内容の一つとして「コミュニケーション能力、対人関係能力の育成につながるような教育」⁴⁾が求められている。よって、看護教育においては、対人関係を形成するためのコミュニケーション技術の習得に向けた教育が重要であると考えられる。

そこで、精神疾患患者を取り巻く治療的環境への理解を深め、精神疾患患者と援助関係を形成するための方法を考察することを目的としている。精神看護学援助論における成功体験を語るコミュニケーション演習を行うことで、学生がどのような学びをしているのか明らかにし、コミュニケーションスキルを高める教育方法への示唆を得ることを目的とした。

1. 研究方法

1) コミュニケーション演習の概要

A 大学看護学部では、精神看護学を精神看護学概論、精神看護学援助論で構成し、2年次に講義と演習による授業を行っている。精神看護学援助論(2単位 45時間)の中で、「患者との関係成立のための手立て(演習)」に3コマ充て、対人関係の技術(看護師—患者関係)、精神科における専門的技術の活用、プロセスレコードを用いた看護師の自己洞察自己理解の活用について学習し、実践することで理解を深めている。その中で、コミュニケーション演習を展開している。

この演習は相手の話を聴くことを目的に実施している。演習では2人1組になり、話し手と聞き手の役割を演じる。聞き手は話し手に3分間インタビューを行う。イン

*連絡先: 中山亜弓 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

タビュの内容は話し手の成功体験(例えば達成感があったこと、嬉しかったこと、褒められたこと)についてである。インタビューを始める前に、学生には自身の成功体験について回想し、いつ、どこで、どんな体験をしたのか用紙に記載してもらった。学生は役割を交替し、互いに聞き手と話し手を体験する。

2) 研究対象

対象は、A大学看護学部において2012年度の精神看護学援助論を履修し、コミュニケーション演習を受講した学生である。研究参加の同意が得られた学生の演習後の自由記述レポートを分析対象とした。レポートは、『話し手としての学び』『聞き手としての学び』について記述することを課題として提示した。

3) データ収集期間

平成25年2月

4) 研究デザイン

質的帰納的記述研究

5) 倫理的配慮

対象者へは、レポート課題を提示した時に、研究の概要(研究目的、方法、匿名性・機密性の保持、協力への同意の有無は成績に一切関与しないこと、自由意思での参加であること)を説明し、自由意思での研究協力を依頼した。レポートを研究データとして使用することに同意した学生のレポートのみを分析対象とした。

6) 分析方法

学生のレポートを研究者間で記録を読み返しなが、学生言葉の意味の共通理解に努め、演習の学びに関連のある記述(素データ)を選び出しコード化した。前後の文脈を考慮しながら同一の意味内容ごとにまとめ、関連性、類似性を検討し整理する過程を繰り返し、表題を付けた。類似する表題をカテゴリー化し、妥当性、関連性を検討し構造化した。分析の妥当性を高めるために、質的研究の専門家にスーパーバイズを受けた。

2. 結果

研究協力の同意を得た学生63名の記述(回収率98.4%)を分析対象とし、195のコード、11のサブカテゴリー、4のカテゴリーを抽出した。コミュニケーション演習において、学生は【反応を捉えながら伝える】【表情を添える】【話す環境を整える】【興味・関心を向ける】ことを学んでいた。以下カテゴリーを【】、サブカテゴリーを〔〕、学生が記述した素データを「」で示す(表1)。

1) 反応を捉えながら伝える

【反応を捉えながら伝える】とは、相手の反応を捉えながら伝わるように話すことを意味しており、〔相手に伝わるように考えながら話をする〕〔相手の反応を確認しながら話す〕から構成されていた。

〔相手に伝わるように考えながら話をする〕には、「相手は私の話したい話題についてよく知らないため、そこを

表1 コミュニケーション演習における学び

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
反応を捉えながら伝える	相手に伝わるように考えながら話をする	相手に伝わるように話すのが難しかった(16)/話すのが苦手なので大変だった(2)/上手く話せなかった(2)で、相手に申し訳なかった(3)/どのように話したらわかりやすく伝わるか考えた(9)/話すときのポイントを活用した(3)
	相手の反応を確認しながら話す	相手の反応を見つ話題を広げた/聞き手の反応を見ながら話すことが大切(3)
表情を添える	感情を伝えるには、話し手の声や表情が大切	自分の感情と一緒に伝えるには、話の順番や自分の声、表情が大切だ(2)
	聞き手の表情や態度で話す雰囲気に変化する	相手の表情や話し方で自分の話し方も変わる(7)/相手が真剣に聞いてくれていると安心感があった(2)/聞き手が笑顔で話を聞いてくれていて楽しかった(8)/頷きや相槌が入るとただ聞いてもらうより嬉しい(6)/頷きや相槌で話を聞いていることを伝える(12)/話し手の方を見て話を聞くと感情を感じ取れた(6)/感情を表面に出して聞くと相手も気持ち良く話してくれた
話す環境を整える	聞き手の質問が会話を和ませる	質問がないと会話を続けることができなかった/聞き手が質問をしてくれたので話をしやすかった(15)
	聞き手からの言葉かけで会話の幅が広がる	質問を投げかけると、より会話が深まった(10)/聞き手から働きかけると良いコミュニケーションになる(5)/相手のことが知れて新たな発見があった(5)/聞き手としては、どんな話をしてくれるか楽しかった(11)
	話す環境を考える	どのようにすれば、話しやすいか考えるのは難しい(16)/話しやすい環境を考えた(5)
興味・関心を向ける	相手が興味を示すと嬉しい	相手が興味を持ってっていると話していて嬉しかった(6)
	共感することで相手の感情を汲み取れる	共感してもらうことが嬉しかった(7)/共感することで気持ちを理解できた(7)
	話し手に興味を示すと話が広がる	興味を示すと話し手も心地よく話していた(6)/共通の話題だったので話が広がった(2)
	相手の話をよく聴く	聞き手が傾聴してくれると話しくなった(2)/相手の話をよく聞くことが大切(6)

上手に伝えて話をするのが難しいなと感じた」「上手に伝えるために、どのように構成したら良いかなど、考えながら行った」などの記述があり、話すときのポイントを活用しながら相手にわかりやすく伝わるよう考えることを学んでいた。

〔相手の反応を確認しながら話す〕には、「話の内容は相手が興味のあることなのか不安になった」「相手の反応を見つづ話題を広げていった」などの記述があり、相手の反応を見ながら話をすることを学んでいた。

2) 表情を添える

【表情を添える】とは、感情を伝えるには表情が大切で、表情や態度によって雰囲気を変化することを意味しており、〔感情を伝えるには、話し手の声や表情が大切〕〔聞き手の表情や態度で話す雰囲気が変化する〕から構成されていた。

〔感情を伝えるには、話し手の声や表情が大切〕には、「どのような筋道で話せば理解しやすくなるか、表情、話し方を気をつけた」「自分の感情と一緒に伝えるには、話の順番や自分の声、表情が大切だと感じた」などの記述があり、自分の感情と一緒に伝えるには話し手の表情が大切であることを学んでいた。

〔聞き手の表情や態度で話す雰囲気が変化する〕には、「自分の話す内容がつまらないのではないかと不安に思いながら話し始めたが、相手の顔が笑顔だったので、安心して話せた」「聞いてくれているということが姿勢や態度から伝わってきて、とても話しやすかった」「聞くだけでなく、きちんと顔を見ることで、相手の感情をなんとなく感じれたので、楽しく聞けた」などの記述があり、表情や傾き・相槌など聞き手の態度が話し手に安心感を与え、ポジティブな感情になることを学んでいた。

3) 話す環境を整える

【話す環境を整える】とは、聞き手の質問や言葉かけで会話を和ませ、話しやすい環境を考えることを意味している。〔聞き手の質問が会話を和ませる〕〔聞き手からの言葉かけで会話の幅が広がる〕〔話す環境を考える〕から構成されていた。

〔聞き手の質問が会話を和ませる〕には、「自分が知って欲しいことを話し、それに対して相手が反応してくれるのが嬉しかったし、質問されるともっと話したくなるし、会話が弾むので受け答えや反応は重要だと思った」「あまり広がらない話かなと思って不安だったが、相手がうまく引き出してくれて話しやすかった」などの記述があり、話の内容や状況に合わせた聞き手の質問によって話しやすくなることを学んでいた。

〔聞き手からの言葉かけで会話の幅が広がる〕には、「質問を投げかけると、より会話が深まり、相手も楽しく話

せるのかと思った」「相手のことを知りたい気持ちがあるので、質問は割とやりやすかった」「自分の知らない分野の話だったが、逆にいろいろ聞くことができ、話題が広がったと思う」などの記述があり、聞き手の言葉かけで相手の新たな発見に繋がることを学んでいた。

〔話す環境を考える〕には、「聞き手としてどういった反応や言葉が話し手にとって話しやすいものなのか考える必要があった」「相手がどの部分を一番伝えたいのか感じ取るのは難しい」「どういう反応をしたら、相手が話を広げやすいか考えた」などの記述があり、聞き手はどのようにすれば相手が話しやすいか考えることを学んでいた。

4) 興味・関心を向ける

【興味・関心を向ける】とは、相手に興味・関心を示し話すことを意味している。〔相手が興味を示すと嬉しい〕〔共感することで相手の感情を汲み取れる〕〔話し手に興味を示すと話が広がる〕〔相手の話をよく聴く〕から構成されていた。

〔相手が興味を示すと嬉しい〕には、「相手が興味を持ってくれているとわかると、楽しくなり、もっと話したいと思った」「相手が共感してくれたり、興味を持って質問してくれることで、話が広がった」などの記述があり、聞き手が興味を持って聞いてくれると嬉しく感じることを学んでいた。

〔共感することで相手の感情を汲み取れる〕には、「自分のことを人に話して、共感してもらうことが楽しかった」「自分だったら・・・と置き換えて話を聞くことで、共感したり気持ちを理解することができた」などの記述があり、話の内容に共感することで相手の気持ちを理解できることを学んでいた。

〔話し手に興味を示すと話が広がる〕には、「興味を持って聞いていると相手のことがよくわかって、そのことについてもっと知りたいとも思えるし、楽しかった」「共感できたり、興味のある内容だと、質問が浮かんできやすかった」「話題が共通のものであったので、展開もしやすかった」などの記述があり、聞き手が興味を示すことで、相互の会話が弾むことを学んでいた。

〔相手の話をよく聴く〕には、「聞き手が傾聴してくれると話したくなった」「聞き漏らさないように神経を使うとしんどい」「相手がその内容に対してどう考えているかをちゃんと読み取ることが大切だと思った」などの記述があり、聞き手が傾聴を示すことの大切さを学んでいた。

3. 考察

看護学生はコミュニケーション演習において話し手・聞き手ともに、相手に関心を向けながらコミュニケーションを図るスキル、表情や態度など非言語的コミュニケ

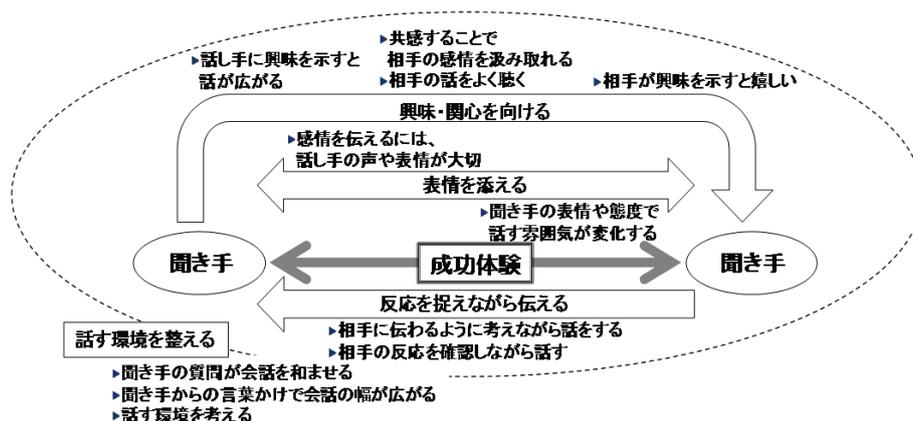


図1 コミュニケーション演習における教育効果

ーション・スキルを学んでいた。話し手は聞き手の反応を捉えながら、聞き手に伝わるように話をしていった。一方、聞き手は話し手がどうすれば話しやすくなるのかを考え、話す環境を調整し、話し手に傾聴、共感することで感情を汲み取れるよう、自身の聞く態度に関心を向けながら話を聞いていた(図1)。

今回のコミュニケーション演習において、「楽しい」「嬉しい」といったポジティブな感情の表現は学生の素直な自分を表現することを促し、その感情の共有によって、相手に受け入れられる体験へと変化したと考える。すでに関係が築けている学生同士が成功体験を語ることでポジティブな感情を表現でき、さらに和やかな雰囲気や心地よい会話に繋がっていた。青柳らは、精神看護学実習における学生の対人関係構築のプロセスにおいて患者との信頼関係を深めたきっかけは学生と受け持ち患者の間で共有できる時間や、効果的なコミュニケーションを取ることができる安心感が持てる雰囲気が、患者との信頼関係を深めるきっかけになることを示しており⁵⁾、今回の演習からも話す環境を整えるスキルや相手へ興味・関心を考えながら会話をするスキルの向上に効果があったことが示唆された。

そして今回の演習では、学生同士の相互作用を伴った関係形成の過程を体験できる効果があった。瀧澤らは、学生と患者が対話の中で日常生活の経験を伝えあうことが患者の強みを育む関わりであり、患者と看護師の相互作用を伴った援助関係と示している⁶⁾。精神看護学実習では、患者の強みに触れながら患者個人の日常生活行動の援助をしていく。そのためには患者に関心を向け、相手の表現する全てを受け取りながら患者を理解していくことが必要となる。それらを体験できる演習となったことが示唆され、引き続きコミュニケーション演習を続けていきたい。

文献

- 1) 櫻井清：精神看護学の実際。中央法規出版、69-75、1999.
- 2) 平澤久一：治療的関わりと精神科看護におけるコミュニケーション。日総研、8-10、2005.
- 3) 長家 智子：看護学生のコミュニケーションに関する研究：生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて。九州大学医学部保健学科紀要、1、71-81、2003.
- 4) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。2012.
- 5) 青柳直樹・齋藤和子：精神看護学実習における学生の対人関係構築のプロセスとその関連要因 ペプロウの対人関係理論の視点から。群馬パース大学紀要、6、101-111、2008.
- 6) 瀧澤直子・吉野由美子：精神看護学実習における学生の共感経験に関する研究－共感経験が学びに及ぼす影響の検討－。東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集、19、21-28、2009.